

美しいきもの

～ 明治・大正・昭和 ～

- 会 場 松平家史料展示室
- 会 期 平成31年1月17日(木)
～3月18日(月)
- 休館日 1月28日(月)、29日(火)、
2月12日(火)、25日(月)～27日(水)

明治維新を経て、日本は、政治・経済・文化とあらゆる面で大きく変わっていきましたが、女性が身に付ける「きもの」にも、江戸時代までのきものには見られない、新しいデザインや技法、生地や色彩が用いられるようになりました。江戸時代までのきものとの違いに注目して、明治・大正・昭和のきもの魅力を4つのポイントから見ていきましょう。

●あざやかな色彩

明治時代後半～大正時代にかけてのきものには、目に飛び込んでくるような色あざやかな地色が見られるようになりました。これは、明治時代に入って、化学染料が用いられるようになったことで実現したものです。江戸時代までの、藍や紅花をはじめとする天然染料では出すことの出来ない、あざやかな色彩にぜひ注目してください。

青みを帯びたパープルの地色が印象的な振袖は、越前松平家19代当主康昌の夫人・綾子（明治30〈1897〉～昭和54〈1979〉）が、婚礼の際に持参したきもの一つです。このパープルの色味は化学染料を用いたもので、天然染料では決して出すことの出来ない地色です。袖の振りと裾・褄に配された洋花のモチーフ、そして陰影を付けた油絵のような表現も、明治時代後半から大正時代にかけてのきもの特徴です。



紺青縮緬地洋蘭模様振袖 越葵文庫（当館保管）

●夏のきものの生地

江戸時代までの夏のきものは麻製の帷子あさかたびらが中心でしたが、明治・大正・昭和にかけては、絹製の夏織物が普及しました。江戸時代にも用いられていた絹縮きぬちぢみ（緯糸よこいとに撚よりをかけて、縦にしぼ（しわ）を出した絹製の生地）や、絹（横に透き目を出した絹製の生地）の他にも、絹の透き目の間隔を変則的にしたり、縦に透き目を出した透織すかしおりなど、見た目にも涼感を演出する夏のきものの生地が生み出されました。



青絹地格子作土模様単衣（部分）当館蔵



紺青縮地あやめ模様単衣（部分）越葵文庫（当館保管）

くろとめそで ● 黒留袖

黒留袖は現在、婦人の礼服として定着していますが、黒留袖が誕生したのも明治時代末～大正時代のことです。黒留袖は、西洋のブラックフォーマルの影響が、きもの地の色にもたらされたものと考えられています。

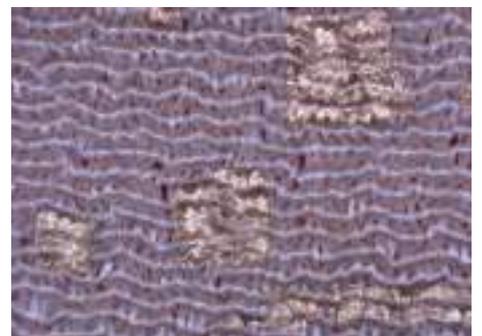
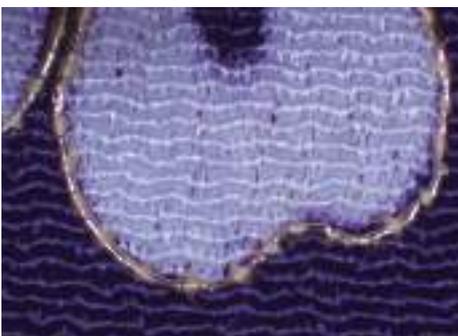
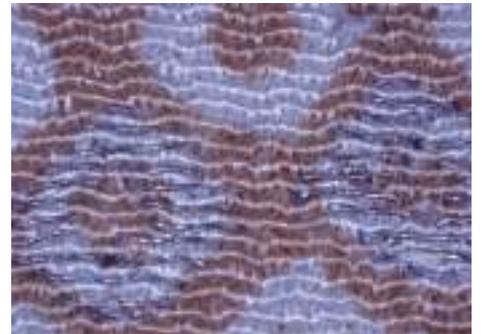
松平綾子が、大正5年の婚礼時に持参したきものにも、複数の黒留袖が詠えられており、大正時代初めには、華族などの高位の家において、ブラックフォーマルとしての黒留袖が定着していたことがうかがえます。



黒縮緬地菊模様着物 越葵文庫（当館保管）

● 多彩な加飾技法

金糸・銀糸を生地直接差し込む刺繍は明治時代のきものの特徴です。



江戸時代から用いられる^{よりきんし こまぬい}撚金糸の駒繡

江戸時代前期にとだえた、金箔を直接生地に押し付ける^{すりはく}「摺箔」は、明治時代に再び登場します。

【関連イベント】

(担当学芸員による展示解説)

ギャラリートーク

1月20日(日)、2月11日(月祝)、
3月10日(日) 午後2時より40分程度

次回の企画展

春季特別展「大安禅寺の名宝」

平成31年3月21日(木)～5月6日(月)

企画展「徳川家と越前松平家」

平成31年3月21日(木)～5月19日(日)

松平家史料展示室 展示解説シート No.119
平成31年1月16日発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1
電話 (0776) 21-0489 FAX (0776) 21-1489
担当 佐々木佳美

印刷 宮本印刷